

## 論文要旨

【研究背景】大規模災害時に血液透析治療はダメージを受けやすく、透析患者は透析の遅れが命の危機に繋がるため、災害時の血液透析の医療支援体制が急速に整備された。また、透析患者の原疾患の変化、長期療養化、本人・家族の高齢化による課題があり、災害時の透析患者支援では、患者自身の被災体験と被災時のニーズを明らかにする必要があるが、透析患者自身の語りに基づく論文は存在しない。

【研究目的】東日本大震災で大津波被害を受けた透析患者の体験とその意味について、ハイデガーを理論的基盤とする現象学的アプローチを用いて記述することを目的とした。

【方法】1. 研究対象者：東日本大震災で大津波被害を受けた透析患者6名。2. 理論的基盤：ハイデガーの現象学。3. 研究デザイン：質的記述的研究。4. 研究期間：平成24年9月～平成26年12月末。5. データ収集及び確認：60分の非構造的インタビューを数回ずつ実施した。記述された「体験」を参加者に事前送付し、記述されている内容が「自分自身の体験」として了解されるまで面接を続けた。6. 分析方法：Giorgiの現象学的アプローチに基づいた分析。7. 倫理的配慮：聖路加看護大学倫理審査委員会の承認（承認番号：12-050）を得たのち、研究参加候補者を機縁法で紹介してもらい、事前に院長と看護師長の承諾を得た後、研究参加候補者へ自律性、匿名性、公表等を説明し同意を得て実施した。

【結果】被災した透析患者は、〈一瞬にして多くの大切なものを失う〉〈さまざまなつながりを失う〉という大津波被災体験に加え、〈弱き存在であることが露呈する〉〈透析のために大切なつながりを自ら手放す〉という体験をしていた。そして、その後可能な限りもとの状態に戻るために、〈大切なつながりから紡ぎなおす〉〈透析患者ならではの体験を活かしてつながる〉〈新たなつながりを紡ぐ〉というように、《つながり》を一つ一つ紡ぎ、あるいは新たな《つながり》の可能性をめがけて生活していた。

【考察】様々な《つながり》を失ったことを幾度となく繰り返し認識する体験は、ハイデガーのいう「被投」であり、可能な限り《つながり》を一つ一つ紡ぎ、あるいは新たな《つながり》の可能性をめがけて毎日の生活を営む体験は、ハイデガーのいう「企投」であった。研究参加者は、《つながり》を、《人として生きるために自分自身が必要とする結びつき》と意味づけ、自分自身の〈孤独〉と真に向き合いつつ、被災体験を通して得た〈気づき〉を深化・拡大させ、その都度の可能性を目がけて行動しているようであった。

【結論】被災した透析患者は、透析患者ゆえにより多くの心身の危機状態にさらされた後、それぞれの〈孤独〉と折り合いをつけると共に、透析導入をきっかけに諦めていた自分自身の可能性を見直し、被災前よりも他者や地域に向かう視野を深化かつ拡大して、可能性を追い求める体験をしていることが窺われた。